生徒が「多面的・多角的な考えを深める」過程やそのための工夫

― 授業後も考え続ける授業 ―

愛知県犬山市立犬山中学校　増田　千晴

キーワード：50 分の授業　50 分では終わらない　考え続ける

はじめに

道徳科の目標に示されている、「人間としての生き方」を学ぶのに 50 分で十分なのかと常に自問してきた。道徳の授業で考えたことが自分の中で次の問いを生み、また、考えることで考えを深めるのではないかと思っていた。今回、貴重な機会をいただき、拙いながらもこの二つの思いを実践研究したことをまとめた。

1.「多面的・多角的な考えを深める」をどのようにとらえるか。

(1) 中学校で「多面的・多角的な考え」「深める」をどのようにとらえるか？

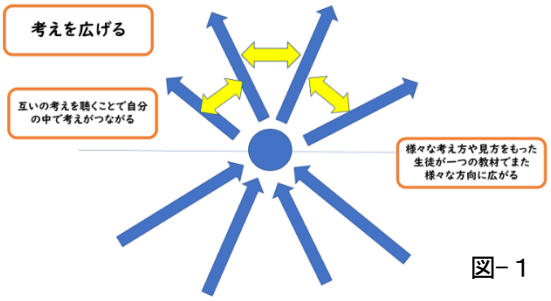
学習指導要領「道徳科の目標」で小学校と中学校では以下のように示されている。

> 小学校「道徳的諸価値についての理解を基に，自己を見つめ，物事を多面的・多角的に考え，自己の生き方についての考えを深める学習」
> 中学校「道徳的諸価値についての理解を基に，自己を見つめ，物事を広い視野から多面的・多角的に考え，人間としての生き方についての考えを深める学習」[1)]

その違いは、「物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習」にある。できる限り広い視野から物事を見つめて自分の考えを広げ、自己を含めた人間としての生き方を深く考えるということである。自分の考えを広げ、それを深めることである。

(2)「考えを広げる」とは？

道徳の授業で、一つの教材に対して様々な考え方や見方をもった生徒が多方向から集まってくる。互いの考えを聴き、新たな考えを構築して、また様々な方向に自分の考えを広げる。互いの考えを聴くことで自分の中で他者と自分の考えがつながり、今までより考えが広がっている状態になる。図-1 では生徒一人一人の考えの広がりを矢印で表している。図-2 では互いの考えを聴きあうことで考えがつながり今までよりも考えが広がる様子を表している。このようにして、他者と自分を関わらせながら自分の考えを広げ続けていく。この状態を「考えを広げる」ととらえる。



図－１

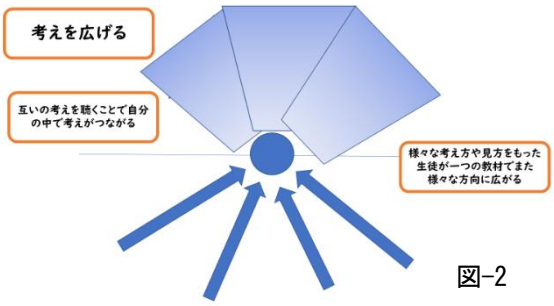


図-2

(3)「考えを深める」とは？

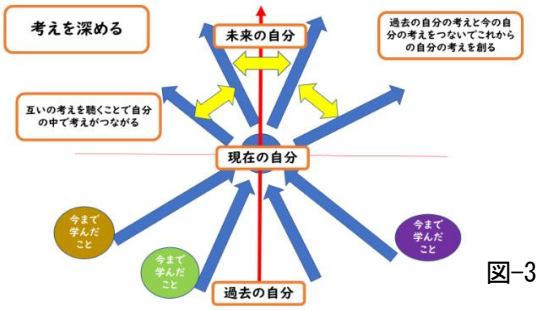


図-3

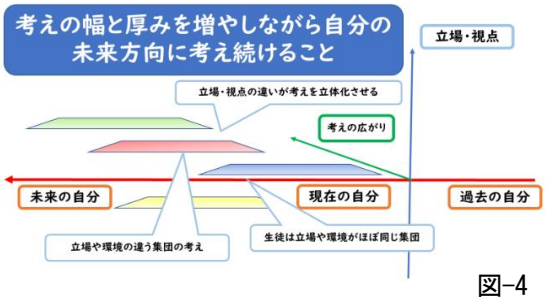


図-4

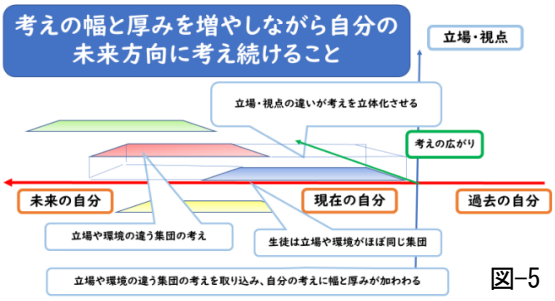


図-5

「深める」は、次の二つの視点から考える。一つは、自分の時間軸である。二つ目はその時間軸に加え、自分の生活している集団とは違う立場や視点をもった集団の他者の軸である。

一つ目の自分の時間軸である。図-3 のように縦軸を自分の時間にする。道徳の授業で一つの教材に出会い、生き方を考える時には、今まで学んだことを取り出し、自分の中でつないで考える。今日の自分、現在の自分の考えが創られる。さらに、過去の自分の考えと今の自分の考えをつないでこれからの自分の考えを創っていく。

二つ目の違う立場や視点をもった集団の他者の軸である。生徒が生活している集団の中で生き方を考えるとき、考えを広げることはできる。いろいろな立場や環境の生徒集団ではあるが、限界もある。中学生という年齢の同じ集団である。ここに大人、親、ゲストティーチャーなどの考えを聴き、自分と違う立場の視点が加わって考えに厚みが生まれる。X 軸を自分の過去から未来への時間、Y 軸を立場や視点、Z 軸を考えの広がりとする。自分の考えの幅と厚みを増やしながら自分の考えを未来の方向に進めている。このように、「深める」とは、多面的・多角的視点から考え続ける姿勢を育てること、新たな疑問や課題に対して今まで学んだことを取り出し、活かしながら考え続けることであると捉える。（図-4、図-5）

2. どのような授業を作るのか

50 分の授業が最も重要である。人間の弱さ醜さを自覚しながらも、人間のよさを感じることを全ての基盤とする視点をもって考えずにはいられない「問い」（発問・中心発問）が必要である。その問いに対して自分の考えをもつ。多面的・多角的に考える（考えを広げる）ために、①自分と他者の考えを俯瞰し、②考えの理由・根拠を考え、発言、③自己内対話と他者との対話が激しく往還する場面を作る。自己内対話、他者との対話で自分の道徳的価値を再構築・更新して多面的・多角的な考えを深める。授業中や授業後に生徒の中に①自己へ、他者へ、新しい「問い」が生まれ、②「問い」を考え続ける。生徒は、③学んだことを取り出し、それを基に考える。そして④自己の成長や変化を自覚、分析する。このように、多面的・多角的な考えを深める。考えを広げ、深めることは、50 分の授業内で完結するものではない。自分の中で問いが生まれ、学んだことを取り出して考え続けることである。50 分の授業を要として、それを

基に自分が人としての人生をどう生きるか、考え続けるための環境を作ることも必要である。考え続ける環境は、後日さらに自分の考えを書くために ICT を利用して入力、次の授業で自分の疑問を提示する、日記で書いたことを紹介、学級通信で紹介、道徳用クラスルームに生徒が意見を投稿する等である。

3. 授業の実際

50 分では終わらない考え続ける授業の実践３例を挙げる。

(1) 人間の弱さ醜さを自覚しながらも、人間のよさを感じることを基盤とする視点で発問を構成する授業

教材名　星はやさしく光っていた（ある中学校教諭の手記より）
C－（11）公正、公平、社会正義

ねらい　母がコロナ感染者のいる病院の医療関係者であるだけで、傷つく言葉をかけられた小学 6 年の娘の気持ちやその母の気持ちを通して、コロナウィルス感染症にかかわる風評被害の背景にあるものを考えるとともに、だれに対しても公正、公平に接しようとする態度を育てる。

授業の流れ

〇教材「星はやさしく光っていた」の範読を聴く。
〇悪口（風評被害）の根底にあるものを考える。

人間の弱さ醜さを自覚する発問

なぜ、「ばいきんがうつる」ということばがでてくるのだろう。

〇言われた側（娘）、母親、言った側の気持ちを考える。
言った側
・怖いから・感染したらどうしようという不安な気持ち・危険を遠ざけたい
・自分だけはうつりたくない

人間の弱さ醜さを自覚する発問

〇悪口は言ってはいけない、自分のことだけ考えているのはよくないことを知っているのに、言ってしまうのはなぜかを考える。
・怖いから自分の心に負けて言ってしまう。
・人の心は弱いから。

〇恐怖心や弱い心に負けて、差別や偏見の言葉を言ってよいか考える。
・人間だから弱い心はあるけど、やっぱり悪口を言っていいことにはならない。
・誰の心にも不安や恐怖心という心の弱さがある。

人間のよさを感じる発問

〇「人間は弱いものだから悪口を言ってもしかたないのか？」

人間のよさを感じる発問

〇弱みに人が支配されて生きているのか。

弱い心に負けて、言ってしまわないために、どんなことを考えておかなければいけないのだろうか。

50 分授業の深まり

①相手の気持ちを考えることを忘れないようにする。
②ひどいことを言うんじゃなくて「大丈夫だよ。」って応援してあげる。
③心の中では、ひどいことを思っても絶対に人に言ってはいけない。
④応援すべき・恐怖心に負けない・相手を理解する

⑤いろんな人に対する、理解を高めることが大切。理解力を高めるには、相手のことをよく知ることが大切。その人のことを何も知らないのに、差別したりすることが問題。
⑥悪口を言わず、みんなで一緒に乗り越えていける世の中にしたいし、全員が無理なら、自分だけでも一緒に乗り越えたいです。
⑦「人間なんだからしょうがない」という甘えた考えは捨てて、その人の立場を理解し行動しようと思う。
⑧悪口は言うのも聞くのも楽しくないから。もし誰かが人の悪口を聞かせてきたら「そういうの興味ないから。」って言う。自分が言わないためには、直接、人に言えないことは言わない。

50 分授業後の深まり

学級通信を通して全員の意見を紹介する。

授業の中で生徒の考えは、人間の弱さ　相互理解　信頼・友情　社会連帯に広がった。学級通信で全員の意見を紹介すると、⑧の意見に生徒は以下のように注目した。

なるほど！自分は流されて、悪口やひどいことを言ってしまう。
人って弱い！！
自分を守ってるだけじゃないの？
言われている子を守らなくていいの？

という「問い」が生まれ、さらに 1 時間追加して友情について授業をした。

(2) おとな（保護者・先生）の視点も加える授業

通常の授業では、生徒の視点で考えを広げ深めている。図-4 で示したように、「深める」ためには、生徒以外の視点の考えを聞きながら学ぶことが必要である。生徒だけで考えるだけではなく、大人の視点が加わることで子どもの視点だけでは気が付かない違う考え方を知ることができる。その結果、考えが広がることに加え深くなる。おとな（保護者・先生）の視点も加えることで今までよりもより多面的・多角的に深く考えられる。

教材名　国境なき医師団・貫戸朋子　（教育出版）
ねらい　貫戸朋子さんが自分の判断が正しかったのかいまだに悩んでいることを通して、命の大切さを様々な立場から考え、自分の命は自分だけのものではなく誰にとっても大切なものであり、生命が尊いものであるという心情を育てる。

授業の流れ

①「国境なき医師団・貫戸朋子」の教材をクラスルームに投稿。保護者にも読んでもらい、酸素を「切る」「切らない」の保護者の意見を聞いてジャムボードに貼る。
②生徒には、じっくり一人一人の考えを読む時間を設定する。
また、その時間があってもただ読むのではなく、「もっと詳しく聞きたい考え」「質問がある考え」を見つけておくように伝えるとより対話が深くなる。
③保護者の意見をモニターに表示する。
授業参観当日、保護者も生徒もほぼ「切る」であったが、「親ならどうするか、自分の大切な人ならどうするか。」と保護者に質問した。保護者に考えを話してもらう。「切らない」にその理由を添えて話してくださり、生徒から拍手が起こった。

保護者が授業に参加して発言

・自分の子どもなら酸素は切りません。
・今までたくさんの人に支えられて生きてきて、その恩返しもしないまま子どもを死なせてはいかんと思うし・・・
・どんな子供だって親にとっては一番だからね。

④**多角的に考えを広げる発問**　自分の子ども、大切な家族だったら、酸素を切りますか？

保護者の考えを聞いた後に立場を変えて生徒に発問して考える
家族だったら切りません。家族でも、助かるほうを優先すると思うな。
親なら切る。子どもなら切らない。

⑤**多角的に考えを広げる発問**　医師や親、家族の立場を考えた後、貫戸さんが、なぜ、まだ答えが出せないでいるのかを考える。
貫戸さんは「自分以外の医師なら助けられたかもしれない。」と思っている。
自分の技術がもっとあったならばという後悔があるのでは。
どの立場でも必死になって考え命を救いたいと考えている。

50 分授業の深まり

それほど命は尊いし、難しいことが実感できた授業となった。
命は大切という考えから、親の立場の考えを聞くことで、「命」についてさらに考え、命はなぜ大切か自分の考えを再構築して深く考えることができた。

輝き　２年３組学級通信　命を大切にする・授業参観号

①**すぐ、捨てていい命はない**ということ
②**大切な人でも、知らない人でも命は平等に扱わないといけない**と思った
③命は**一人一人にある平等**にあるものだから大切だと思う
④**どんな立場でもその命は誰かの大切な命**だと思う。
⑤命が**何よりも大切**なことがわかった。
⑥**みんな誰かにとっての一番で、そのことを忘れずに命に対する考えを持っていくべき**だと思った。
⑦**命には人の思いとかつまってるし生きるために必要**だから命は大事だと思った
⑧命は平等であることを踏まえて、**それぞれの命をそれぞれのやり方で尊重すべき**だ。
⑨命はみんな平等で**自分の判断で命の安否が変わってしまうから命に対して向き合うときはそれなりの覚悟がいる**ということがわかった
⑩**今まで沢山の人に大切にしてもらって**、その人のことをとても大切に思っている人もたくさんいるから、**軽く考えて良いものではないと思った。**

50 分授業後の深まり

授業の最後にノートに記入した「学んだこと」を道徳通信で紹介する。学級全員の「命」をどのように考えたかを知る。また、自分の考えを更新したり新たな問いが生まれたりする。このようにして、生徒は自分の考えを深めていく。保護者の意見が聞ける場は、生徒にとって貴重な体験となった。次の授業参観でも保護者参加型を希望する生徒が多くなった。

(3) 様々な視点（内容項目）を含んでいることに気付く授業

図-3 で説明したように、生徒は教材に向き合ったとき、今まで学んだことを取り出して今の自分につないで必死に考える。多様な課題が含まれていることに気付き、自分の考えが広がっていく。いくつもの内容項目が含まれていることに気付く。学級で多くの考えに出会い、自分の考えを広げ、深めていく。学習指導要領解説にあるように、生徒の多様な考えを引き出し、多面的・多角的視点から考え続ける生徒を育てる実践に挑戦した。

学習指導要領解説より[2)]
6　情報モラルと現代的な課題に関する指導
（2）現代的な課題の扱い
- 例えば，複数の内容項目を関連付けて扱う指導によって，生徒の多様な考え方を引き出せるように工夫すること
- 多様な見方や考え方があることを理解させ，答えが定まっていない問題を多面的・多角的視点から考え続ける姿勢を育てることが大切

複数の内容項目を関連付けて扱い、生徒の多様な考えを引き出すための教材を自作した。

現代的課題　SDGs を道徳科から考える教材（自作）

現代的課題は様々な視点（内容項目）を含んでいる。生徒がそれらの要素を含んでいることに気付き、今まで学んだことを自分の中でつなぎ、活かして考え続けることをねらいとした教材を開発した。

教材名　取りすぎない漁半世紀

「先輩たちが残してくれたキンメを残す」（自作教材）

SDGs 関連目標　14 海と海洋資源を守り、持続可能な形で行う
2 飢餓をなくし、食糧生産を持続可能に

教材内容　千葉県勝浦のキンメダイ漁師は 50 年前から資源を取り過ぎないよう厳しい自主規制を作り守ってきた。「今」だけ「金」だけ「自分」だけのことを考えれば、漁師たちは物質的には豊かな生活もできた。しかし、先輩が守りつないだ海を自分達も次世代へつなげるために様々な努力をしている。その姿から漁師の心にあるものを考える。

ねらい　キンメダイ漁師の海洋資源に対する考え方やその行動を通して、漁師の心の中にあるものを考える。それらを通して、人は地球上の生き物の一種であり人類という視点で海洋資源を守ることに含まれる多面的課題に気付き、人類自らの生き方を正し、節度を守り節制に心掛け、安全で調和のある生活の実現に努めようとする道徳的実践意欲と態度、先達への尊敬の念や感謝の気持ちを深め、今後は、自分たちの力で、地球（地域社会）をよりよいものに発展させていこうとする実践意欲と態度、自然に対して謙虚に向き合おうとする実践意欲と態度を育てる。

ねらいとする内容項目は理解を広げた 3 つの内容項目とし、指導要領解説の「人」を「人類」、「郷土」を「地球」と置き換えて考え、3 つの内容項目の理解を以下のように広げ授業を構成した。

A（2）節度・節制

人類がきまりある生活を通して**人類**自らの生き方を正し、節度を守り節制に心掛け、安全で調和のある生活の実現に努めることが、**人類**の自分自身の将来を豊かにするものであることを自覚できるようにすることが何よりも重要。**人類の節度・節制ととらえることができる。**

C（16）郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度

地球（郷土）のよさに気付き、 **地球**（郷土）に対する誇りや愛着をもつとともに、**地球**（郷土）に対して主体的に関わろうとする心や態度を育む。先達のおかげで、先達への尊敬の念や 感謝の気持ちを深め、今後は、自分たちの力で、**地球**（地域社会）をよりよいものに発展させていこうとする自覚をもつことが必要。[3)] **＊**太字は筆者が加筆

D（20）自然愛護

自然の中で生かされている人間が、自然に対して謙虚に向き合うことの大切さを理解すること。自然の生命を感じ取り、自然との心のつながりを見いだし共に生きようとする自然への積極的な対し方。

授業の流れと多面的の考えを広げ深めるための発問

①人間の弱さを自覚する発問　「今」だけ「金」だけ「自分」だけを考えてもいいのではないか？

②自分事としてとらえる発問　とれるだけとる派？がまんする派？

③人間のよさ（強さ）を考える発問　ここまで厳しいルールを守ることができたのはなぜ？

④多面的に考えを広げる発問　キンメダイの漁師の心の中にあるものは何だろう？

これらの発問により生徒は以下のように考えを広げ、この課題に様々な視点で考えた。以下は、生徒の授業ノートに書いた意見である。

自然愛護

一人一人の努力で環境はよくなるものだと思った。SDGs をすぐに達成できなくても、地球を今より良いものにできるのかなと思った。

やっぱり、みんな一時のお金はほしいけれど、それよりも環境や海への気持ちの方が大切だから漁獲量を減らせたと思った。

遵法精神

ルールを守り続ければ、いいこともあるし、守り続けることで結果も出ると思うので、改めてルールを守ることの大切さがわかりました。

節度節制

持続可能な社会を作り上げるにはたくさんの我慢や苦労があると思うけど一人一人の選択でよりよい社会を作っていきたい。

伝統文化

「SDGs よりも前からやってる。」この言葉すごくいいなと思いました。SDGs より前から地道に続けているから安定した漁ができていて海や魚を守ることができるのかなと思います。

全国一斉にこの取り組みをやったら漁獲量は減るが、次の世代へと日本食の文化をつないでいくためには、未来のことも考えながら取り組んでいくことが何事も大切なことが分かりました。

勤労・仕事への誇り

環境も守って自分も守るということを 50 年間も続けている漁師さんをとても尊敬します。漁師さんは本当に海を大切にしていることが分かりました。私も、そんな優しい心をもてる人になれるよう頑張りたいです。

教材を作成した当初は、「節度・節制」「伝統・文化」「自然愛護」の視点を考えたが、授業を実践すると、「遵法精神」「勤労」の視点も加わった。生徒の考え方や見方の柔軟さを感じた。

4. 授業を続けた後の生徒の成長

50 分の授業の中で考えを広げる発問をする。授業中の生徒の「問い」授業後の生徒に生まれる「問い」を取り上げてさらに考える機会を設けてきた。教師が考える発問より、「もっと考えやすい発問」を生徒が考えるようになった。1 時間の授業が終わると生徒は今日の授業を分析する。授業中でも「この聞き方だと今日考えようとしていることに迫れないと思うので、聞き方を変えたほうがいい。」と助言してくれるようになった。生徒は教師からの発問に真摯に向き合って考えようとする。「深く考えたい」から生徒にとってのよりよい発問を考える。生徒自身が道徳で考えることの必要性と楽しさを感じ、授業を教師と共に創ることに参加、協力する生徒が育った。道徳の授業から影響を受け、自分の行動を変えて中学校生活を送った生徒もいた。

(1) 生徒と授業づくり

3.（3）の実践の教材を授業後生徒がさらに分かりやすく提示する方法、発問の工夫を考え、

クラスルームに投稿してくれた。NHK の番組「仕事の流儀」を見て、卒業間近であったが、どうしても授業にして生徒と共に考えてみたいと思った。番組放送から授業まで 1 週間もなかったが授業を構成し、実践した。生徒は、考えを広げて発言しやすく、自分の考えを深めやすくするにはどうするか、生徒にとって分かりやすい授業をどうするかという視点で教材作成に協力した。

（2）生徒の成長

「2 年間ありがとうございました。1 年生の時、先生の道徳の授業がきっかけで道徳と誰かの役に立つのが好きになりました。3 年生になってからは、道徳の授業はまだか、まだかと待って過ごしました。2 年間楽しい学校生活を作ってくれてありがとうございました。」1 年と 3 年で担任した生徒の卒業式の時のメッセージである。時間をかけて成長し、行動にも表れている。3 年間で成長を見ることができた成長の早い生徒かもしれない。

5. 課題

（1）授業前や授業後で何かしらの時間を使っている。50 分の時間内には収まらない。

「人間としての生き方についての考えを深める学習」のために必要な時間ということはよく分かっている。生徒が「多面的・多角的な考えを深める」を誰もができる持続可能な授業を目指す必要がある。

授業前と授業後で時間を使っている。50 分の時間内にはすべて収まらない。授業前には教材の事前読みや教材に関するアンケートを行うことがある。ICT の利用で時間は短縮される傾向にある。授業後、学級通信（道徳通信）等で生徒の意見を紹介したり、その意見に対する問いを学級に投げかけたりする。他の教科は、課題で問題を解くなど家庭学習をする。このことから考えれば、授業後のこの取り組みがあっても問題はないように思われる。しかし、この道徳科の取り組みは、誰もが持続可能なのだろうか。他の教科が家庭学習で課題を出すように、道徳科も当然のように、授業の前後に考える時間を作るときが来ることを期待したい。

（2）生徒の成長には時間がかかる。

道徳で「多面的・多角的な考えを深める」授業を行ってもすぐに結果が出るものでもなく、目に見える結果が表れるわけでもない。これが他教科との大きな違いである。考えを広げたり深めたりした姿は授業中の発言やノートに書いたことで表現される。生徒の行動から直接読み取ることは難しい。

中学校は 3 年間を見通して生徒を育てる。学校の規模にもよるが、3 年間同じ生徒を担任することは稀である。2 年担任することはある。私と 1 年間のみ授業を行った生徒、2 年間授業を行った生徒も成長していく様子は、授業の手応えで実感する。これは感覚であって実証できるものが今のところない。道徳科において「何が分かったか。」「何ができるようになったか。」を毎時間明確にする必要があるのか疑問である。3 年間という時間の中で成長を見守る教科であると考える。この時間の長さが重要で目には見えないものを学んでいることを教師生徒両方で自覚するべきではないかと考える。

生徒と共に教材と授業作り

終わりに

この実践をまとめることで、道徳の授業は、50 分が重要だが、50 分では終われないものだという思いを強くした。可視化できない人間の心や複雑な考えを可能な限り、分かりやすい言葉で共有する教科であり、その学びの成果は長い時間が必要である。これこそが道徳科のよさであると考える。

注

1）文部科学省『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 特別の教科 道徳編』2018 年、15 頁。文部科学省『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 特別の教科 道徳編』2018 年、13 頁。

2）文部科学省『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 特別の教科 道徳編』2018 年、100-101 頁。

3）文部科学省『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 特別の教科 道徳編』2018 年、29,56-**57**,64 頁。　*太字は筆者が加筆